

選考会を終えて

佐藤信

31年目のOMS戯曲賞は、候補作の作者中二名が過去に最終選考に残り、他四名は佳作受賞者という、緊張感のある選考会となった。おそらく、それだからこそという意味で、候補作に共通するひとつの「もの足りなさ」を感じて選考会の冒頭に発言した。

すべての表現行為と同じように、戯曲もまた、おおもとの出発点はそれぞれの書き手の「身边」にある。戯曲の場合、紡がれた言葉は直接にはではなく、演者の身体を通して「語り言葉」に変換された上で聞き手（観客）に届けられる。戯曲、演者、観客の三者が出会うその場所を、仮に「劇場」と名付けると、戯曲という様式のテキストには、作者の「劇場」に対する想像力、あるいは構想力がかならず埋め込まれている。

ぼくの感じた「もの足りなさ」は、今回の候補作それぞれから読み取った「劇場」への想像力、構想力に由来する。作者はいま、その作品がどのような「劇場」で、また「演劇環境」で上演されることを想定しているのか。テキストが意識的、あるいは無意識的に前提としている「劇場」があまりにも「身边」的に過ぎるのではないか。いささか断定的な発言の趣旨はそこにあった。

現在のこの国の演劇の「多彩さ」「豊かさ」を否定するつもりはない。経済的な困難を抱えながら、それでも演劇の可能性を信じて活動をつづけている場、人、動きは周辺に多数存在している。自分もまたそのひとりという気持ちを抱えていることも間違いない。

「しかし」と言ったらいいのか、「だからこそ」と言ったらいいのか、この国の「劇場」、あるいは「演劇環境」を大分以前からおおっている、先の展望がはっきりと見えない「停滞感」を問わずにはられない。

いわゆる「小劇場演劇」という概念がこの国の演劇界に定着してからすでに半世紀以上になる。もしかしたら、今回の応募作に限らず、現在生み出されている演劇テキストの多くが、「小劇場演劇」やそしてその周囲に派生した「演劇環境」をあまりにも無頓着に前提とし過ぎているのではないのか。選考会、そして授賞式後選評会での発言は、六〇年代の「小劇場演劇」発生に深くかわり、長い間それに加担してきた者としての、そんな自問自答の結果だった。

受賞式後の交流会で、佳作となった『てばなれ』の作者私道かびさんと挨拶をかわし、一緒にいた俳優の辻村優子さんを紹介された。以前セラピストとしての仕事をしていた辻村さんは、私道さんの『てばなれ』創作のきっかけをつくり、またその劇作の協力者でもあった。

その辻村さんから、彼女が2021年からつづけてきた「ほぐしばい」の経験を聞いて、ぼくはここまで書いてきた自問自答についての踏み込んだ回答とも言える、あたらしいころみがすでにはじまっていることを知った。選考会のはじめから『てばなれ』に着目していながら、その手応えの脈絡をしっかりとどき直して読みきれなかった自分の不明を強く感じた。

辻村さんの実践について詳しく報告する場でないのが残念だが、2024年4月におこなわれた『ほぐしばい～よみほぐし実践編～』の、マッサージ台に横たわったたったひとりの観客への14日間、一日三回の上演は、まさにこの時代の「劇場」へ向けられた奥深い問いそのものだったと思う。『てばなれ』はその延長線上に、私道さん自身の「社会への問い」をふくめて、正確に位置づけられている。丁寧にたどっていけば、今回のほかの候補作のいくつかにも、同じような可能性の芽は隠されていたのかも知れない。

反省してみると、大賞『そして羽音、ひとつ』を受賞した、第八回佳作『祭りの兆し』以後の休筆を、個人的にとっても残念に思っていた山岡徳貴子さんの復活も、いたずらに「もの足りなさ」を言い立てて変化を急ぐ者への、後続世代からの腰をすえた警告だったような気がする。

今回の選考会は、OMS 戯曲賞選考委員の責任と難しさ、作者ではなく作品を生み出すため、賞の意味について、あらためて考え直すための貴重なきっかけとなった。

山岡徳貴子さん、私道かぴさん、おめでとうございます！ 最終選考にノミネートされた方々をはじめ応募者の皆さん、ありがとうございました！